

春夏秋冬 台湾徒然

第33回

「台湾之光」王建民

柳本通彦

日本のメディアでも大きく報道されている通り、台湾は陳水扁總統一家に続き馬英九台北市長までが汚職疑惑に揺れている。いまのところ真相は不透明だが、すでに總統の妻と娘婿が起訴されており、マスコミは連日大騒ぎである。

しかし、いまもうひとり台湾を騒がせている人物がいる。ヤンキースの王建民だ。今季19勝、アメリカンリーグ最多勝をとったエースである。

彼はいま「台湾之光」と呼ばれている。確かにお先真っ暗の台湾に一筋の光明を投じているといえるかもしれない。もしヤンキースが優勝していたら、ジータとMVPを争った可能性さえある。無論、大リーグで19勝をあげた日本人投手はなく、歴代アジア人選手でも最高の成績であるそうだ。

渡米は2000年。当時わずか20

歳。台湾でプロの経験はなかった。その翌年にイチローがマリナーズに入っているが、その一部始終が台湾のメディアで報道されていたのに比べ、王建民という名前すら大半の台湾人が知らなかった。誰に注目されることなく1Aから下積み之苦勞を続け、昨年メジャー昇格、いきなり8勝をあげた。そして今季大化けした。

にわかに台湾のマスコミに追いかける羽目になり、「出生の秘密」をあげられたりして、取材拒否という時期もあった。

大人しい人である。ほとんどしゃべらない。質問にも一言しか返さない。191センチの長身から投げてるのだが、剛速球とは言いがたい。素人目にはどうして打てないのかわからない。



台北駅前の巨大なパネル

大半が内野ゴロになる。ボウリングの球を打っているようだと言われる。防御率は3・63とまあまあ。しかし奪三振は、最多勝を分けたツイインズのサンタナが245だったのに比べ、王投手はわずかに76。なんだか人柄を表すような投球なのである。

その王建民が11月半ば台湾に凱旋した。空港から台南の実家まで「ファン」とマスコミにもみくちゃにされての帰省だった。彼はほとんど笑わなかった。実に迷惑そうだった。自宅前にひとだかりがしているのをみて、車を引き返したほどだ。

こちらの報道は、写真入りカードやサインボールに××万円のプレミアアがついた、サイン会参加費が500米ドルといった、カネにまつわるものが大半だった。自宅を盗撮しているカメラマンがいる。自分で撮ったスナップを売りさばいている「ファン」がいる。

政党幹部が背番号40のピンストライプを着て演説している（しかもそれがあとで海賊品だとわかったり……）。「台湾之光」、王建民はどこか可哀相なのである。

今年の年俸は日本円にして4100万円。本稿執筆時、年俸10億円以上、落札額60億円といった数字が乱舞している松坂投手との差は天文学的できさである。松坂の去就は台湾でも逐一報道されていて、大リーグ入りも確定になった彼が王建民を一つの目標にしているといった紹介まである。

王建民が渡米したのはちょうど同郷の陳水扁總統が初当選した年だった。そのとき、国民党支配を打破した若き新總統もまた「台湾之子」ともてはやされ異様なフィーバーの中にいた。負けが込めば、台湾の「ファン」もマスコミも手のひらを返して背を向けることを彼は知っている。松坂と同じマウンドに立つ「台湾之光」は来季その真価が問われよう。

やなぎもと・みちひこ

京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）